

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第741号 平成26年5月26日

誕生日を知らない女の子（1）

昨年秋に第11回開高健ノンフィクション賞を受賞した黒川祥子著「誕生日を知らない女の子」は、児童虐待の深刻な現実を真正面から捉えた作品です。

作品の中で、母親の虐待を受けて育った20代後半の青年が、母親を殺害した事



件の裁判で「僕は今、虐待死させられた子どもの方がずっとうらやましい」と叫んだという話しを載せていますが、「誕生日を知らない女の子」は殺されずに生き残った子ども達のその後のルポルタージュです。

児童虐待の罪深さは、虐待を受けて育った子ども達が、「親からの虐待」と「虐待の後遺症」という二つの頸木を背負いながら生きざるを得ないという事にあります。

児童虐待というと、虐待する親の問題や虐待そのものに目が行きがちですが、黒川祥子さんは「誕生日を知らない女の子」の中で5人の子ども達の虐待後の傷の深さ、過酷な現実を描いています。彼女は、

「想像を超えるような事実には圧倒された（1月23日付北海道新聞から）」といいつつも、彼らの日々の暮らしから目を逸らさず、虐待がもたらしている問題の深刻さを私達に厳しく突き付けています。

親から虐待を受けた子ども達は、その事で心身を大きく傷つけられているにもかかわらず、一方では、彼等を救おうとして一生懸命手を差し伸べてくれる大人達を傷付けるというケースが多く見られます。

2010年8月に東京都杉並区で起きた「里子虐待死事件」は、非常に不幸な事件でした。この事件は、逮捕・起訴された被告が声優だった事もあり、大きく報道されました。

私は、被告は里親となろうとした位だから意識は高かったはずなのに何故と思ったものですが、虐待を受けて育った子の後遺症は被告の想像を遙かに超えるものだったに違いありません。子どもは親から愛されるために生まれて来たといわれますが、「親から無条件に愛されたい」という願いが虐待によって断ち切られた喪失感の

深さは、如何ばかりでしょうか。

虐待を受けた子どもの攻撃の手が、本来は虐待した相手に向かうべきなのに、逆に自分を守ろうとしてくれる心優しい人に向かってしまうというのは、本当に不幸な事だと思います。(塾頭：吉田 洋一)